交流活動の活発化を図るプロジェクト型学習（PBL）

-沖縄女子短期大学海外研修プログラムの事例紹介-

Encouraging Exchange Activities through PBL:

Okinawa Women's Junior College's Study Abroad Program

沖縄女子短期大学総合ビジネス学科講師　**又吉　斎**

MATAYOSHI Itsuki

(Lecturer, Department of Business Administration, Okinawa Women's Junior College)

キーワード：海外研修プログラム、プロジェクト型学習（PBL）、海外留学

1.　はじめに

急速にグローバル化が進む中、沖縄女子短期大学は、1996年に米国ハワイ大学コミュニティカレッジ7校（以下、UHCCと称する）と国際交流事業を目的とした姉妹校提携を締結し、以来、UHCCの協力の下、約2週間の海外研修を毎年実施しており、これまでに延べ150名を超える研修生が当該ハワイ研修プログラムに参加している。尚、本研修プログラムは、UHCC提供による語学研修、及び現地日本語クラスの学生との異文化交流のほか、ハワイ沖縄県人会との交流活動やホームステイ体験、また現地の観光施設見学やディナー・クルージング、乗馬体験といった様々なアクティビティを実施し、研修生の異文化相互理解と英語コミュニケーション能力の向上に注力している。

更に、海外研修の直前に、事前研修プログラムとして、15時間（90分×10回）程度の集中講義を実施し、英会話レッスンのほか、ハワイの自然、歴史や文化等に関する理解を深めるためのカリキュラムを中心に事前指導を行い、海外研修プログラム全体の充実を図ってきた。

当該研修プログラムの成果については、ハワイの歴史や文化に対する理解が深まったことに加え、英語学習の動機付けに繋がっているという一定の成果が、事後研修報告会において参加した研修生の報告から窺える。しかし、一方では、「もっと英語を勉強しておけば良かった」という内省的なコメントも多く寄せられるなか、2週間という短期間の海外研修を通して、果たしてどの程度、実際に英語コミュニケーション能力が向上したのかという点については、定量化された成果として把握するには至っておらず、この点では課題が残ると言える。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

いずれにしても、研修生の英語コミュニケーション能力の向上は、研修全体の成果を左右する課題であることを示唆している。特に、現地学生やハワイ沖縄県人会の方々との交流活動においては、英語力のみならず、積極的にコミュニケーションを図ろうとする主体性、及び自分自身や地域文化について伝えるための基礎知識とそれらを簡易な英語を用いて表現する英語運用能力が、現地での活発な交流活動の実現には不可欠であり、そのための事前学習が重要であると考える。そこで、2015年度より、研修生の主体的な英語コミュニケーション能力の涵養を目指して、これまでの事前研修プログラム全15時間（90分×10回）を24時間（90分×16回）に拡大し、「海外研修事前学習」、「海外研修」としてそれぞれ教養科目1単位の正式科目として単位認定することが決定された。これを機に、ICTを活用したプロジェクト型学習（以下、PBLと称する）を主柱とする当該研修プログラム（「海外研修事前学習」、及び「海外研修」）として、シラバス、及び海外研修プログラムの一部見直しを行った。そこで、本稿では、当該海外研修の事前指導と位置付けられる「海外研修事前学習」、及びハワイでの「海外研修」におけるPBLの事例を中心に紹介し、これまでの成果と今後の課題について報告する。

2. 「海外研修事前学習」シラバスの概要

（1）到達目標：

当該授業の到達目標は、次の5つの目標に要約される。

① ハワイと沖縄、双方の歴史や自然、産業、文化等について理解を深める。

② 自分自身や地域文化について理解し、主体的に発信するための実践的な英語運用能力を磨く。

③ 個々の英語力の不足を補うため、文字情報のほか、映像（静止画・動画）や音声といったマルチメディアを活用した各種資料を研修生協働で作成しながら、実用的なICTスキルを習得する。

④ 協働で作成したマルチメディア資料を用いた英語のプレゼンテーション能力を習得し、と同時に、現地での交流活動において積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

⑤ PBLにおけるリサーチやインタビュー、グループ・ディスカッション、プレゼンテーション等の課題を通して、協働する上で大切な主体性や傾聴力、他者に働きかける力といったコミュニケーション能力を磨く。

（2）講義の概要：

当該授業の内容については、次の4つのプロジェクトに要約される。

① プロジェクト ― 大学を紹介する

はじめに研修生を各学科、コース別にグループ分けし、それぞれの学科・コースに関する英語の紹介を計画させる。この際、各学科・コースの特色が伝わるよう、紹介する内容についてディスカッションさせながら、2～3分程度の映像資料としてビデオ撮影、編集作業を行わせる。

最後に、各グループの映像資料を鑑賞しながら、英語のプレゼンテーションにおけるポイン

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

ト（発声、間の取り方、発音の指導等）を確認する。

② プロジェクト ― 沖縄を紹介する

はじめにクラス全体で、参考資料（配布プリント）を基に、沖縄県の概要（位置・面積・人口・気候等）を英語で確認する。その後、4～5 名程度のグループ別に、沖縄県の歴史や自然、伝統文化や観光施設等についてディスカッションをさせ、各グループで決定したテーマについて情報を収集させると同時に、英訳作業を分担して行わせる。この際、タブレット PC を用いて、インターネットのオンライン辞書などを利用させ、実際の研修先でも活用できるようにアドバイスする。

次に、タブレット PC のアプリ“Voice”を利用し、英語のナレーションを録音しながら、関連するアイコンや画像を挿入して、短編アニメーション・ビデオの資料を作成させる。

最後に、各作品を用いたプレゼンテーションを実施し、クラス全体で振り返りを行う。

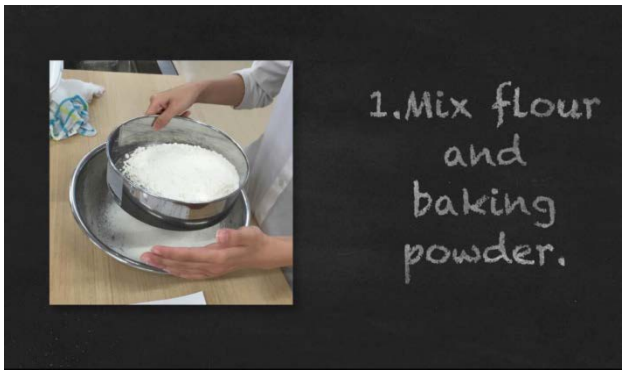
③ プロジェクト ― 沖縄料理を紹介する

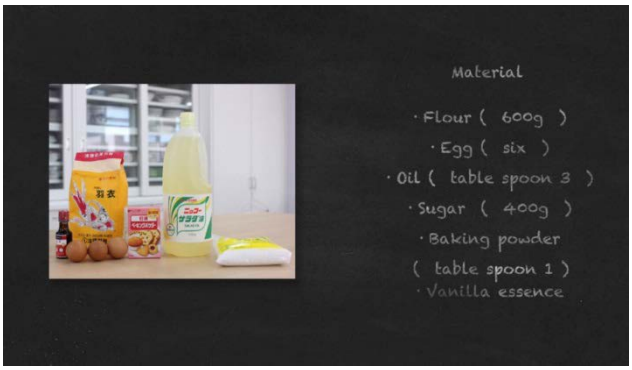
このプロジェクトは、ハワイ現地の提携校の担当教員からの提案で、現地の日本語クラスの学生と本学の研修生との交流活動の一環として、沖縄料理を協働で作り、昼食会を開催するというプランを受けて、本学の研修生に対し、事前にレシピや調理法についての英語を習得させ、またそれらを資料化することで、現地での交流活動に繋げることをねらいとしている。尚、資料化については、レシピは印刷物として、また実際の調理法については映像として、それぞれ作成させる。

プロジェクトの流れとしては、まずクラス全体で何を作るかについて話し合い、コスト面や調理方法、調理時間、現地で調達できる食材かどうかなどの視点から 4 品を選択した。

次に、4 つのグループに分かれて、それぞれ担当する料理のレシピや調理法についてリサーチさせ、オンライン辞書を利用しながら、英語の資料を作成するよう指示する（教員は必要に応じて英訳作業をサポートする）。

実際に調理実習を行い、作り方を確認させると同時に、教員がその様子を静止画と動画で撮影し、後日、これらの画像データを基に先述のアプリ“Voice”を用いて、英語のレシピの資料（印刷物・動画）を作成させ、最後にこれらを用いたプレゼンテーションを実施する。





アプリ“Voice”で作成した調理方法とレシピのアニメーション映像の１コマ

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

④　プロジェクト ― ハワイについて知る

最初に、クラス全体でハワイの概要について、タブレットPCを利用させながらリサーチを行い、収集された情報を整理しながら、内容を確認していく。

次に、ハワイの歴史や自然、伝統文化のほか、主な観光施設や各自で知りたいテーマについてリサーチさせ、大き目の模造紙に情報をまとめさせ、得られた情報の共有を全体で図る。

※ 参考までに、当該講義の実際のシラバスにおける講義計画表を以下に転載する。

表1：　講義計画表（90分×16回）

	講義内容	活動内容
1回	海外研修の概要、趣旨の説明	過去の海外研修ビデオを鑑賞する
2回	プロジェクト① 大学を紹介する 情報の英語化（グループ・ディスカッション）	各学科別に内容を検討する
3回	情報の映像資料化（グループ・ワーク）	タブレット PC を用いて、各学科別のビデオ資料を作成する
4回	プレゼンテーション（グループ・ワーク）	ビデオ資料を用いて発表する
5回	プロジェクト② 沖縄を紹介する 情報収集（グループ・ディスカッション）	BS法[1]を利用して、内容を検討する
6回	情報整理 （グループ・ワーク）	KJ法[2]を利用して、内容を整理する
7回	情報の英語化（英訳作業） （グループ・ワーク）	タブレットPC、Online辞書を利用する
8回	情報の映像資料化（グループ・ワーク）	タブレットPC、アプリVoice[3]を利用する
9回	プレゼンテーション（グループ・ワーク）	アプリVoiceを用いて発表する
10回	プロジェクト③ 沖縄料理を紹介する 情報収集・整理（グループ・ワーク）	BS法、KJ法を利用して、内容を決定する
11回	演習：調理実習	調理の様子を映像に記録する

[1] BS（ブレインストーミング）法とは、Alex F. Osborn考案の会議方式の一つである。
[2] KJ法とは、考案者である川喜田二郎（東京工業大学名誉教授）のデータをまとめる手法で、別名「発想法」とも呼ばれる。
[3] Adobe社製のプレゼンテーション用iPadアプリ。ナレーションを録音し、関連するアイコンや画像を配置するだけで、簡単にアニメーション・ビデオが作成できる。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

12 回	情報の英語化（レシピの英訳作業）	タブレット PC、Online 辞書を利用する
13 回	プレゼンテーション（グループ・ワーク）	タブレット PC を用いて発表する
14 回	プロジェクト④ ハワイについて知る 情報収集（グループ・ディスカッション）	タブレット PC を用いてリサーチする
15 回	情報整理（グループ・ワーク）	BS 法、KJ 法を利用して、情報を整理する
16 回	プレゼンテーション（グループ・ワーク）	大き目の模造紙を用いて発表する

※　尚、上述のプロジェクト以外にも、毎回の講義の 20 分程度を英会話レッスンに充てて、必要最低限の英語力の習得を図っている。

3.　「海外研修」プログラムの概要

ここで、2015 年度の海外研修の実際の活動内容について、PBL を中心に報告する。

（1）ウィンドワード・コミュニティカレッジ（以下、WCC と称する）での主な活動内容：

①　英会話クラス（以下、EFL と称する）における現地学生とのグループワーク

WCC での EFL では、ホテルやレストランでの接客をはじめ、ビジネスの様々な場面で必要とされる基本的なビジネス英語（例：自己紹介、電話応対、受付業務、道案内等）を中心に、現地の英語講師による 2 時間のレッスンを実施して頂いた。具体的には、初めに担当講師が基本的な会話表現を紹介し、発音の指導や英語表現の解説等を行った後、PBL の一環として、ロールプレイング（役割実演）を各グループ単位で練習・口頭発表させるという流れであった。更に、本学研修生の英語力の不足を補う補助役として、現地学生数名に協力してもらい、発音や英作文のチェックのほか、ロールプレイングに参加して頂いた。

②　日本語クラスとの交流活動

WCC の日本語クラス（90 分間）に合流し、現地学生との交流活動を行った。具体的には、初めに本学の研修生が英語で自己紹介し、次いで現地学生が日本語で自己紹介を行った後、今度は、本学の研修生が、現地学生の日本語レッスンに補助役として参加し、発音の指導や日本語表現の説明を支援した。

更に、PBL の一環として、授業の後半に、現地学生と協働で行う「マシュマロ・チャレンジ[4]」という演習に参加した。マシュマロ・チャレンジとは、与えられた道具（乾燥スパゲッティ 20 本、90

[4] ピーター・スキルマンというデザイナーによって考案された演習プログラムで、TED（Technology Entertainment Design：学術分野、ビジネスなどさまざまな領域の講演会を開催し、WEB 配信を行う米国の非営利団体）で紹介されて以来、世界各国でチーム・ビルディング等のワークショップとして取り入れられている。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

cmのヒモとテープ各１本、マシュマロ１個）を使って、できるだけ高いタワー（自立できることが条件）を作り、最後にそのてっぺんにマシュマロを置いて高さを競う、というプロジェクト演習であるが、これを 4～5 人のチームとなって進めていくという、とてもユニークな PBL で、現地学生との交流活動として非常に盛り上がった。

現地学生との交流プログラム演習「マシュマロ・チャレンジ」の様子

③　現地学生・教職員との昼食会

先述の通り、このプロジェクトは、ハワイ現地の提携校の担当教員からの提案で、現地の日本語クラスの学生（10 名）と、本学の研修生（14 名）との交流活動の一環として、沖縄料理を協働で作り、昼食会を開催するという計画であったが、現地の調理施設が予想していたよりも小さく、協働するのに必要なスペースの確保が困難であったため、実際の調理を本学の研修生のみで担当することとなった。その代わり、本学の研修生を調理するグループと英語で調理法を説明するグループとに分け、作業を分担して行った。続く昼食会では、食事を囲みながら、沖縄の料理やハワイの食文化等について英語、日本語を交えて、それぞれ自由に会話を楽しんでいる様子であった。

④　演劇クラスとの交流活動

現地の演劇クラス（90 分）にお邪魔し、異文化交流活動を実施した。具体的には、現地学生による演劇の実演紹介やハワイ伝統の歓迎の歌の披露に続き、本学の研修生による沖縄空手の演武のほか、琉球舞踊の披露を通して、相互の文化に対する理解と関心を深めた。

異文化交流の様子（左側：現地学生による演劇の１コマ、右側：研修生による空手の演武）

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

⑤　陶芸クラスへの訪問

WCC における PBL 以外の活動としては、陶芸クラスへの訪問が挙げられる。この陶芸クラスでは、WCC のインストラクターから陶芸に関する基本的な知識をレクチャーして頂いた後、本学の研修生の中から 2 名の希望者が、実際の陶芸を指導して頂いた。ここでは、現地学生と本学研修生との交流活動は予定されていなかったが、インストラクターとの質疑応答で多少の英語によるコミュニケーションを持つことができた。

（2）ホノルル・コミュニティカレッジ（以下、HCC と称する）での主な活動内容：

①　幼児教育の特別ワークショップ

このワークショップは、本学の児童教育学科に在籍する研修生向けに、特別に開講して頂いた幼児教育関連のワークショップ形式の授業であるが、PBL 的な活動も一部取り入れている。具体的には、現地の幼児教育専攻の学生との協働の下、英語の童謡の合唱や手遊びの実演のほか、パペット人形の制作とそれらを用いた即興による創作ストーリーのプレゼンテーションなどである。特にストーリーの創作活動における現地学生とのコミュニケーションにおいては、必然的に英語と身振り手振りを交えたやり取りが研修生、現地学生の双方に求められたため、相互のコミュニケーションも徐々に活発化していく様子が窺えた。このように、現地学生と一緒にストーリーの内容を練りながら、各自のセリフを決定していくという協働プロジェクトを通して、本学の研修生は、何とか現地の学生と意思疎通を図ろうとする、いわゆる方略的コミュニケーション能力が引き出されたように思われる。

幼児教育の特別ワークショップの様子（左側：手遊び、右側：創作ストーリーの発表）

②　ハワイの伝統と文化に関するワークショップ

ここでは、ハワイの伝統と文化について、HCC の 2 名の講師の方にそれぞれ 90 分の授業を実施して頂いた。今回の授業の内容は、PBL 型の活動を中心とするものではなく、通常の講義で PBL を実践している様子について事例を紹介して頂くという趣旨のものであった。例えば、ハワイの食文化をテーマにしたプロジェクトとして、HCC 近隣の保育施設や小学校の児童生徒等を大学に招き、ハワイ文化学専攻の学生等が指導者となって、ハワイの特産品であるタロイモやサトウキビの植え付けや収穫といった農作業を体験学習させながら、ハワイの伝統的な食文化を次世代に継承していこうという

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

取り組みが紹介された。このほか、当該ワークショップでは、HCC 施設内の農園を利用して、実際に本学の研修生がタロイモの収穫作業と植え付けを体験するといった、フィールドワーク型のユニークなプログラムも盛り込まれていて、参加した研修生の反応も良好であった。

もう一つのワークショップは、幼児教育の視点を盛り込んだハワイの伝統音楽をテーマとする内容で、演習中心の授業形式で展開された。具体的には、ハワイ語のわらべ歌をハワイの伝統楽器であるウクレレの演奏に合わせて、手遊びを交えながら、実践を通して学ぶというワークショップで、参加した本学の研修生は、ビジネス専攻の者も含め、全員が楽しそうに取り組んでいる姿が印象的であった。

ハワイ文化に関するワークショップの様子（左側：農作業体験、右側：ハワイ音楽の演習）

3. おわりに

筆者は、本プログラムの事前指導（海外研修事前学習）を担当すると同時に、ハワイ現地とのコーディネーターとしての役割を担っている。また、これまでに 4 度、実際に海外研修の引率を経験する機会に恵まれた。こうした貴重な経験を振り返りながら、本研修プログラムのこれまでの成果と今後の課題、及び目標について、以下にまとめておきたい。

（1）海外研修プログラムの成果

本稿の冒頭で先述した通り、当該研修プログラムの成果としては、ハワイの歴史や文化に対する興味と理解の深化が挙げられる。特に今回の事前学習プログラムでは、グループワークとして研修生自身にリサーチさせ、情報を整理した上でプレゼンテーションを課したことで、従来のようにただ単に関連資料を配布して解説したり、読み合わせを行ったりするよりも、研修生はより主体的に、且つ興味を持って、内容を理解しようとする積極的な姿勢が窺えた。このような事前学習における主体的な学びの経験が増えたことで、海外研修の実践の場においても、これまで以上に研修生の積極性が増してきたように感じられた。

同様の変化としては、多くの学生が、海外研修を通して異国での生活にある程度自信を持つことができたという点が挙げられる。こうした海外での様々な経験を通して得られた彼女等の自信は、

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

本格的な中・長期留学を目指したいとか、英語力を磨いて就職に生かしたいといった新たな目標へと結実するケースもしばしば見受けられ、本研修プログラムが参加学生の英語習得の動機付けに繋がっていることを示している。

一方、本研修プログラムの改善計画として実施したいくつかのPBL活動の成果について振り返ってみたい。端的に言えば、PBL 活動を展開したことで、研修生個々の方略的コミュニケーション能力が涵養されたという点が挙げられる。現地の学生と協働でプロジェクトを遂行するためには、必然的にコミュニケーションを図らねばならない状況下に置かれるため、何とか相手に伝えよう、あるいは理解しようと、表情やジェスチャーに変化をつけながら、いわゆる非言語コミュニケーションを多用して、必死にコミュニケーションを図ろうと努めるようになる。こうしたコミュニケーション活動の実践において、研修がスタートした当初は英語力に不安を抱えていた研修生が、次第に積極的な態度へと成長していく姿は、本研修プログラムの成果を象徴するものであり、と同時に、本学のような2週間程度の短期の研修プログラムでも達成可能な成果の一つであることを示唆していると言えよう。

このような方略的コミュニケーション能力を引き出す手立てとして有効と考えられるものの一例としては、タブレット型PCやスマートフォンの活用があったように思われる。実際、現地学生との交流活動の場面では、研修生は指示されるまでもなく自らスマートフォンを利用しながら、単語の意味を検索したり、online辞書を利用して英訳したり、あるいは話題に関連する画像や動画を適宜、参照しながら、内容の理解へと繋げようと試みる工夫も窺えた。この点では、ICT スキルを磨くことによって、実際のコミュニケーションにおける英語運用能力の不足をある程度補完してくれるものと考えられる。但し、スマートフォンを多用することで、英語によるコミュニケーション自体が阻害される場面も少なくなく、会話における意味調べのようなICTの利用については注意が必要である。

（2）今後の課題と目標

様々な形で本研修プログラムに携わってきたなかで、改善すべき課題もいくつか見えてきた。その一例を挙げると、事前研修プログラムと海外研修プログラム、更には事後研修プログラムの系統的な学びの接続という問題がある。例えば、事前研修プログラムでPBL活動の成果物として作成された映像資料は、現地学生との交流活動において、沖縄の伝統や文化に関する話題の提供としては役立ったと言えるかもしれないが、実際の英語コミュニケーション能力の向上に繋がっているかどうかという点に関して言えば、少なくとも引率者として研修生等の様子を観察してきた中では、成果と呼べる変化はほとんど見受けられなかったように思われる。その要因として考えられるのは、映像資料を作成するというPBL活動が、作品の完成をもって目標が達成されたと、研修生のみならず、指導者である筆者自身が無意識に思い込んでしまったことにあるのではないかと思われる。当該PBL活動の重要なポイントとは、学生が協働で完成させた映像資料を用いて、いかに現地での（当然、英語による）コミュニケーション活動を活発化させられるかということであって、映像資料の完成が到達目標では

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

ない。

上述の点を踏まえ、今後の改善点としては、PBL 活動で作成された映像資料を用いた英語のプレゼンテーションを繰り返し練習させることや、映像資料を作成する過程で学習する英単語や英語表現を用いたディスカッションの反復を徹底するという指導を実施したいと思う。

同様に、現地でのタブレット PC やスマートフォンの利用についても、再検討が必要に思われる。これまでは、特に意識することなく、比較的自由に研修生に ICT 機器類を利用させてきたが、実際の交流活動において辞書として頻繁に利用させることは、コミュニケーション自体を ICT 機器類に頼るという解決法へと導く可能性がある。先述の通り、話題の提供や情報の理解を目的とした、画像や映像を提示するための ICT 利用は有益と考えられるが、辞書としての利用については（特にコミュニケーション活動において）今後、必要最低限に留めさせ、なるべく分かる英語力を駆使しながら、且つジェスチャーといった非言語コミュニケーションを通してどうにか意思疎通を図ろうとする積極的な態度を育成し、方略的コミュニケーション能力の向上を目指したいと思う。

今後の目標としては、研修先機関との更なる連携強化を図りたい。具体的には、ハワイ現地の研修先機関と本学とをネットワークシステム(例えばスカイプやフェイスタイム等)を利用して繋ぎ、交流活動を実施するような遠隔教育プログラムを事前・事後指導に盛り込むことは技術上可能かどうか、同じく時差などの環境面も含め検証し、当該研修プログラムの更なる充実を図りたい。

海外研修プログラムについては、2015 年度より、ハワイの私立小学校・附属幼稚園の視察研修を実現することが出来た。児童教育学を専攻する研修生にとっては、専門分野に関連するプログラムとして意義深い経験に繋がったのではと推察するが、一方、ビジネスを専攻する研修生のためのプログラムについては、更なる充実を図る必要がある。例えば、観光ビジネスをリードするハワイの企業訪問やホテルでのインターンシップ体験など、研修生個々の専門分野に関連するような、より実践的なプログラムの可能性についても検討したい。

最後に、UHCC との姉妹校提携の基本方針である互恵の理念という点において、今後は研修生を送り出すだけでなく、ハワイから研修生を迎え入れるホスト側としての受け入れ態勢を整えていきたい。その一歩として、英語で展開できる授業計画のほか、宿泊施設や観光施設、交通機関等の情報提供など、先ずは大学全体として出来ることから取り組んでいきたい。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.